

## 盛況だった「新潟県中越地震による旧山古志村の被災状況と復旧」現場研修会

主催：日本応用地質学会 事業企画委員会

日本応用地質学会 北陸支部

新潟県中越地震による土砂災害研究小委員会

平成 19 年度の現場研修会は、「2004.10.23 新潟県中越地震による災害と復旧状況」というテーマで、11 月 3 日（土曜日）に開催されました。当日は快晴に恵まれ、「旧山古志村にて中越地震の爪痕を見る最後の機会です」というキャッチフレーズが効いたのか、北海道から九州まで全国から 37 名（うち北陸支部 7 名）の参加者が長岡に集いました。以下にこの現場研修会の様子を、写真を中心に報告いたします。下図は主な研修ルートでと場所です。



### 研修場所

- ①横渡
- ②寺野
- ③池谷
- ④昼食（山古志出張所）
- ⑤榎木
- ⑥～⑦東竹沢
- ⑧大日山
- ⑨神沢川



写真 1．参加者全員（撮影者の宮原氏を除く）の集合写真

## 1. 研修概要

10時にバス1台と乗用車2台で長岡駅東口を出発し、最初の現場である「横渡地区」に到着しました。ここで30分ほど岩盤すべりの「すべり面」を、北陸支部の野崎さんと伊藤さんの解説を聞きながら観察しました(写真2)。つぎに、奥地の「寺野地すべり」(写真3)と周辺崩壊地を500mほど歩きながら観察したのち、「池谷地区」に移動しました。ここでは、平野さんからボーリング結果を踏まえた解説があり、参加者から多くの質問が出されました(写真4)。いまだ謎に包まれた砂山(大規模法枠工施工中)の成因についても野崎さんなどから興味深い意見が出されました。

昼食は、晴天のもと旧山古志村役場の駐車場で「油夫地すべり」を眺めながら持参弁当を食べたのち、集合写真(写真1)を撮りました。昼食後は、山古志村で開催されている闘牛に思いをはせつつも、天然ダム(河道閉塞)で有名な「東竹沢地区」に向かいました(写真5)。ここでは、湛水により埋没した集落を見ながら約1Kmを歩いて東竹沢地すべりの法面对策・排水路・砂防ダムなどの災害緊急対策工事を見ました。

次に、未だ当時の面影が残る塩谷集落への荒廃山地をバスの車窓から観察しつつ、中越地震で最大規模の地すべりである塩谷北方の「大日山地すべり」へ向かいました。ここでは、幹事の趣向で、藪こぎのあと比高約30mの滑落崖を全員ですべり降りしましたが、二人の高齢の方は、きっと「なんちゅう事をさせるんじゃ」とお怒りだったことと思います(写真6)。ここでは、農林省OBの初倉さんに詳しくすべりのメカニズムを解説していただきました。最後に向かったのが、最近完成したばかりの山古志トンネル坑口とそこからみる神沢川右岸の旧道(写真7)です。ここでは緒方さんの熱弁が参加者を感動させました。

この時期の新潟には珍しく晴天にめぐまれ、主要被災箇所のほとんどを1日でみることが出来ました。多くの参加者の皆様は、地震によって引き起こされた崩壊や地すべりの凄まじさ、壊滅的な集落とその復興、山奥で繰り広げられる対策工事の規模などに目を見張られた事でしょう。配布された「学習マップ」を使って、いつの日か再度訪れ、じっくりとその変化を観察されるのもよろしいかと思います。なお、お寄せいただいた参加者の感想と宮島さんによる今後の復興に関する提言(私見)を巻末に収録いたしました。

(文責：中筋 章人)



写真2. 横渡岩盤すべり(層すべり)で、解説を聞いた後すべり面を観察する参加者





写真3 寺野地すべりにおける現在対策工完成後（左）と地震直後の斜め写真



写真4 池谷地区で法面对策工を見学



写真5 東竹沢地区の湛水集落跡と放水路

写真6 . 中越地震で最大規模の大日山地すべりの全容 . 藪こぎ後滑落崖をすべり降りる参加者



滑落崖を滑落する参加者

滑落後、初倉さんの解説を聞く参加者





写真7 最後の見学ポイントであった神沢川上流域（新バイパスから旧道を望む）

## 2. 参加者の感想と提言

### ・Nさん

山古志現場研修会では大変お世話になりました。ありがとうございました。今回は観光バス旅行ではなく現場研修でしたから、中筋さんの解説は、要点ズバリで、我々の会にはピッタリの最高の解説でした。私にとりましては収穫の多い素晴らしい会でした。行った甲斐がありました。

新聞や写真、テレビ、学会誌から想像し、状況をほぼ把握、理解していたつもりでしたが、現地を実際に見て、全くの思い違いであることが分かりました。横渡の現場から始まって、まさに、「百聞は一見にしかず」を実感しました。私が体験し、地すべりや地質解析方法、判定方法などが同じであったことも収穫でした。

かつて体験した地すべりで、「山ごと動いている」、大きな岩盤すべりだと判定した現場がありますが、異論もあって一沫の疑問も抱えていましたが、山古志の岩盤すべりをみて、自分の判断が正しかったと実感出来たことも、大きな安心と収穫でした。また地震波が尾根部や切土面等の肩付近で増幅して被害が大きくなる、と言っておられましたが、その現象は私も同様に感じていますが、どのような理屈でなるのか、いまだに分かりません。教えてください。

### ・Iさん

先日の研修会ではたいへんお世話になりました。山古志の主な現場を、第一級の講師の方から直接ご教示頂けることができたことはたいへん有意義な1日だったと感謝しております。

今回塩谷などで、地すべりの運動形態について新たな認識を持つことができ、とても参考となりました。今後ともよろしく願いいたします。

#### ・Sさん

山古志村での現場研修会では大変お世話になりました。早速、研修会報告もメールして頂きありがとうございました。中筋さんのユーモアあふれる分かりやすい解説には、しばし研修会ということのを忘れ、遠足気分で秋の1日を楽しんでしまいました。山古志村の地震災害は、単なる斜面崩壊だけではなく、岩盤すべり、地すべりで被害が大きくなっていたことがよく分かりました。

#### ・Hさん

先日は、山古志村現場研修会で大変お世話になりました。おかげさまで、普段の業務では経験できないような貴重な時間を過ごすことができました。さて、大日山の滑落崖を滑り降りている写真を1枚だけ撮影しておりましたので、添付ファイルにて送付します。実際にはもっと迫力のある降り方をしていたように記憶していますが、写真ではなかなかその迫力が伝わらないのが残念です。

#### ・Mさん

晩秋の日本海側での日帰り研修という条件下で、効率的にバスを使い、被災現場と復旧工事のほとんどの類型を見ることが出来たのは、見学対象の選定、コースの設定、地元で詳しいバス会社の選定、案内者の準備や晴天率の高い研修日の選定など周到な準備の賜物といえます。地震発生以後初めて現地入りしましたが、これまでの情報から推測していたことが、ほぼ確認出来たため、参加した目的はほぼ達成できました。

ただこれまで、学会の調査団の人たちにも言ってきたことですが、地震発生時まで長雨が続き、飽和状態になっていた地下水の役割について、現地説明の人からもほとんど話が無かったのは、残念でした。固結度の弱い砂質の地質、地質構造、地下水の3者によって被災の明暗が分かれたはずですが、また粘土質のところはほとんど滑っていないのではないのでしょうか。

#### ・宮島さんの提言「山古志村の今後についての私見」

山古志村の今後について考えるように、という引率者の要望があったので私見を述べてみます。

そもそも第二次大戦後の農山村地域の過疎化は、乱暴にまとめて言うと、米の自給が100%に達した昭和40年代初期から始まったといえよう。その頃とられた政策は、農村部で機械化農業を勧め、兼業を促進させ、それで生まれた余剰労働力を都市工業側に回す、それをさらに推し進めて兼業農業を出来なくさせ、いずれ専業農家だけで農業生産をさせて（農地集積を行って）余剰人員を都市工業側に振り向けるというものであった。集団就職の名のもとに、農山村の若者たちが駆集められるようにして都市工業側に移動させられたのがその頃である。その後もこの流れは逆流していない。ただし、農地解放で手に入れた農地を、かつて小作であえいだ農民はそうたやすく手離すはずもなく、土地集積という目的は頓挫し、今も難航しているのが現状であろう。

その後政策的には、中山間地で若者が生活できる収益を得るような手立てをほとんどとってこなかったため、若者は農山村に残るのが困難な状況が続いてきた。彌縫策として農村工業導入などと言う施策もとられたが、大勢は変わっていない。かろうじて残っている若者は、地方公務員、農協の職員ぐらいで、あとは中小の建設会社とその勤め先である。

米余り以降からの農業軽視，ここ 10 年ばかりのすさまじいまでの地方切り捨て政策，さらにかろうじて地方にお金を還流していた公共事業の大幅な削減（ピーク時の 6 割を切っている）によって地方の疲弊と荒廃は限界に近いところまでに来ている．仮に公共事業が必要ないとしたら，それに代わる地方への金や人の流れを作るべきなのに，それも無いまま，一方的に削減してきた．その結果が今日の地方の姿である．

こうした流れで見ると，震災は中越地方の過疎化や荒廃をより強めただけともいえる．したがってこれを食い止めるのは，一地方で解決できる問題ではないとも思える．国の政策転換が無い以上，独力での再興は極めて困難であろう．

ただ，山古志村を中心にした地域については，伝統の養鯉業があり，これが大きな収入をもたらすようで，後継者もいるようである．これを柱に若者の帰村定着を促して行けば，村の再興に明るい方向が見えてくるのではなかろうか．そういう意味で，この地方は何の特徴もない地域よりは，復興の手がかりを持っているといえよう．こうした大きな自然災害があった農山村の復興については，本来役所間の垣根を取り払い，住民やこの地域の出身者の意見をよく聞いて，集落の再編整備を含めた総合的で抜本的な対策がとられてしかるべきである．しかし地震後の行政の動きにそうしたものが見られないと仄聞し，いまだに残念に思っている．

都市は自立できないが，地方，特に農山村はいざとなれば自立できる．この自明のことを都市側，あるいは都市的思考を持つ人たちは，忘れていてのではないか．地球規模で自然がおかしくなっている今こそ，都市を支えている農業や地方を尊重し，大切にす政策転換が行われるべきと考える．